



I	男声合唱組曲「尾崎喜八の詩から」	作詩	尾崎喜八
		作曲	多田武彦
		指揮	北村協一
I	冬	野	
II	最後の雪に		
III	春	愁	
IV	天上	沢	
V	牧	場	
VI	か	け	す

作曲家 多田武彦

すでに世界各国でも評判をよび、今秋日本でも発売されたラフマニノフの「晩禱」のレコードは、合唱マニア以外の層にまで広く愛聴されている。私はこのソビエト国立アカデミー・ロシア合唱団の混声合唱を聴いたとき、ふと、あの戦後の関学グリートーンを思い出した。私は、私が聴く前に、あらかじめテスト盤を林雄一郎先生にお贈りしておいたので、林先生にも、その後感想をうかがったところ、先生も「あのレコードを聴き、多くの人々に感動を与えていることも知って、私が永年やって来たあの関学グリートーンの創造と維持が、間違いでなかったことを確認できた」とおっしゃられた。まさにそのとおり、合唱にとって最も大切なハーモニーがなおざりにされる傾向の強い今日の合唱界にあって「晩禱」のような、ハーモニーの美しさをしっかりと聴かせる音楽——それは昭和20年代に私たちがしみりと聴いた関学グリートーンの美しさに類似した感動をよびおこしたのだが——が、深い関心を持たれているということはまさに特筆すべき出来事であった。

久し振りに、私は関西学院グリークラブの依頼で合唱組曲を書いた。いつもそうであるが、私の耳からは、あの戦後の関学グリートーンがいつまでも離れて行かない。いろいろ批判はあっても、私が関学のために曲を書くときは、あの関学グリートーンが耳のそばでなっている。

今回は尾崎喜八先生の自由詩に作曲した。先生の澄み切った詩風が関学グリートーンに何かぴたりしているような気がしたからだ。演奏会のご成功と、今後益々のご発展を祈るとともに、私のような関学グリートーンファンにいつまでも美しいハーモニーを聴かせつけてほしい。

男声合唱組曲「尾崎喜八の詩から」について

多 田 武 彦

「自然と、心から語り合える詩を歌い出すこと」——それが詩人尾崎喜八の全生命である、といわれるほど、その詩は健康な自然と、それに晴れやかに生きている人間を歌っている。

メッセージにも書いたように、関学グリートーンは、こうした詩の音楽的表現にもっともふさわしい澄み切った明るさがあるので、自由詩の難かしさもかえりみず作曲した。この組曲は、尾崎喜八の自由詩に基く音楽的絵画の陳列で、各曲の間の連携はない。しかし一つ一つの作品の中に特色を出してみた。何度読み返しても飽きない、いい詩であったので、久しぶりにさらっと書けた。

第一曲「冬野」は詩人が千葉県三里塚の真冬の夕暮の原野に立って詩っている。

第二曲「最後の雪に」は東京都太田区戸越公園の近くに住んでいた頃の詩である。

第三曲「春愁」は東京都世田谷区上野毛を逍遙した時の作。

第四曲「天上沢」はその名のとおり長野県天上沢を描いたもの。

第五曲「牧場」は同じく御牧が原の情景。

第六曲「かけす」は同じく富士見峠での詩作。

尾崎喜八先生の奥様は、これらの詩の一つ一つを、先生がどこで作られたのかをよく覚えておられた。昨年二月にお亡くなりになられた先生の一周忌が近づこうとする今宵、この組曲の初演がおこなわれることになった。謹んで先生のご冥福を祈りたい。

尾 崎 栄 子

関西学院グリークラブ第43回リサイタルで、父尾崎喜八の作品を多田武彦様が組曲として作曲なさいましたものを初演して下さるというお知らせをいただき、私共残された者にとりまして嬉しい驚きでございました。

父は自然を深く愛し、またそれに劣らず音楽を愛しておりました。初期の作品から晩年の最後に至るまで、常にその中に音楽の弦が一すじひびいておりました。

ここに一昨年夏、父が書きました文章の一節を載せさせていただきます、ご挨拶に代えさせていただきます。

そして今回のリサイタルのご成功とご盛会をお祈り申し上げます。

幼くして歌というものを教えられて以来、更に長じてロマン・ロランの書くものに親しんで以来、音楽は私から離れなかった。その美は私を喜ばせ、鼓舞し、慰め、また時に私を鞭撻しつつ精神を高揚させた。私の詩や文章、つまり今日までの私の仕事は、すべて音楽（それに自然）から養われたものだと言える。もしもこんなことが言えるのだったら、私は詩人としてのジャン・クリストフでありたかった。音楽の美に装われながら文学の仕事に一生を捧げたかった。そしてその望みは、多少なりとも叶えられたように自分では思っている。（新潮社刊「音楽への愛と感謝」後記より）